

平成 24 年度 第 1 回文化芸術に関する意見交換会

1 日 時 平成 24 年 7 月 31 日 (火) 午後 2 時 00 分から

2 会 場 さいたま市役所 議会棟 2 階 第 7 委員会室

3 出席者

(1) 委員 (13 名)

五十嵐健一、井藤仁、石上城行、大久保佐貴玖、おかべりか、齊藤茂、
柴原早苗、竹村潤一、三須康男、宮本智子、村木益実、山口聖子、山田登美男
(以上 13 名)

(2) 事務局 (9 名)

市民・スポーツ文化局 和田局長
スポーツ文化部 野間部長、服部次長
文化振興課 中村課長、織田課長補佐、鈴木主任、横溝主任
株式会社丹青研究所 大木、外山

4 公開・非公開の別 公 開

5 傍聴人の数 5 人

6 内 容

(1) 開会

(2) 市民・スポーツ文化局長挨拶

(3) 委員、事務局等紹介

(4) 委員長・副委員長選出

委員互選により、委員長に石上委員、副委員長に三須委員が選出された。

(5) 概要説明

- ・さいたま市文化芸術都市創造条例の概要説明
- ・本会議の位置づけ及び進め方

(6) 意見交換

< 討議テーマ >

- ・文化芸術活動 (事業) の実施及び参加状況
- ・さいたま市における文化芸術に関わる事業や活動の課題
- ・さいたま市における文化芸術の振興と地域活性化への取り組み
- ・文化芸術都市のイメージ

(7) その他

- ・次回の会議日程 (10 月下旬開催予定) について説明。
- ・本日の会議結果は公開することとし、会議録及び会議の開催結果を事務局にて作成し、各区情報公開コーナーでの閲覧、さいたま市ホームページへ掲載を行う旨を説明。

(8) 閉会

会議録

< 概要説明 >

石上委員長　それでは、次第「5 概要説明（1）さいたま市文化芸術都市創造条例の概要」について、事務局より説明をお願いします。

事務局　資料説明

石上委員長　まず今の説明について、疑問点、ご質問があればご発言ください。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、次に進みたいと思います。「（2）本会議の位置づけ及び進め方」について、事務局からお願いします。

事務局　資料説明

石上委員長　ただいま事務局から説明がありましたが、今の説明について、疑問点など、ご質問があればご発言ください。よろしいでしょうか。

< 意見交換 1 「文化芸術活動（事業）の実施及び参加状況」について >

石上委員長　それでは、次第の「6 意見交換」に入りたいと思います。1つめのテーマに関して、事務局より説明をお願いします。

事務局　それでは、資料2の8ページをご覧ください。
（1）文化芸術活動（事業）の実施や参加状況について、皆様方が文化芸術に関わる活動や事業、こういったものをされているのか、こういった形で参加されているのか、ふだんやっていらっしゃるかたちをご説明いただければと思います。また、特に参加していないというような方は、参加しにくい理由や、例えば「こんな活動があればぜひやってみたい」というご意見があれば、お伺いしたいと思います。

石上委員長　では、1つめのテーマに関して、皆様から順番にご意見を伺いたいと思います。それでは、名簿順で恐縮ですが、五十嵐委員、お願いします。

五十嵐委員　鉄道博物館の五十嵐です。当館はJRの創立20周年記念事業として設立され、鉄道を通じた文化活動ということで、展示、それから年4回程度の企画展、いろいろな教育普及活動、調査研究活動等を行っています。私個人としては、資料担当として、いろいろな博物館や美術館等からの資料の貸出の対応や、マスコミ関係への写真の貸出、撮影などの対応をしています。特に貴重な文化遺産を後世に継承していくためにはどうするかということの日頃いろいろと勉強しています。

石上委員長　ありがとうございます。では、順番にいきますので、よろしくをお願いします。井

藤委員、お願いします。

井藤委員 事業とか活動の紹介というのですが、これもすごく広いですから、何か区切っていた方がいいのかなと思うのですが、どうですか。

石上委員長 ご自身の活動の話をしていただければいいと思います。

井藤委員 岩槻人形協同組合という組織があります。岩槻は人形の町と言われていますが、その中でも、節句人形が何といてもメインであり、節句文化といいますが、節句を啓蒙していかなければいけないということで、それに関わる事業を組合員が全員参加して取り組んでいます。最初に、「流しびな」をやっています。それから、もうすぐ8月18日に今年も始まりますが、「人形のまち岩槻まつり」をやっています。それから、11月3日に「人形供養祭」もやっています。3月に入ると、「まちかど雛めぐり」という、今年で10回目になる新しい事業をやっています。これらは、少しでもお人形に親しんでいただいて、一番元になる節句に結びつけたいというのが狙いです。

それと併せて、市内の各小学校、毎年5~6校程度の小学校ですが、特に4年生、5年生を対象に、組合員がお人形づくりの出前をして、人形に関心を持ってもらおうということをやっています。各学校で1回100~130名ぐらいが参加します。市の教育委員会から各学校に希望を取っていただき実施しています。

石上委員長 ありがとうございます。では、大久保委員、お願いします。

大久保委員 私は、ドイツ概念論の美学の研究をしており、主にヘーゲルやガダマーなどの論文を書いています。芸術作品とは何かということ、その芸術作品を享受する側がなぜ感動するのか、芸術作品はその人にとってどのような意味で生きがいになっていくのか、その人が芸術作品を通して自分と向き合うとはどのようなことなのか、そういった享受者の視点から論文を書いて発表したり、教えたりしています。

石上委員長 では、おかべ委員、お願いいたします。

おかべ委員 浦和っ子で、子供の本の仕事をしています。仕事を通じて、それから仕事の連絡をくれる編集者、お便りをくれる子供を通じて、どうしても自分の子供時代と今ということ、毎日毎日、否応なしに向き合わなければならなくて、子供の文化についてちょっと考えたことを申し上げます。

50年ほど前の私は小学生でしたが、そのころの文化活動というのは、1クラスが60人ぐらいの大きなクラスで、60人のうちの一握りの子供が、絵がうまい、ピアノを習っている。一握りの才能のある子供が輝いて、あとは背景というか、脇役にならざるを得なかった。そういうのが、昭和30年代のまだまだ貧しい日本の小学校政策だったと思います。

私は、今、ご縁があって市立図書館でお絵かき教室をやらせてもらったり、越谷の小学校でお話し会の講師で呼んでもらったりしているのですが、今の子供はずい

ぶん変わりました。みんなが片言の英語は知っている、楽器を知っている、ゲームを知っている。みんなが輝く機会があるのですが、逆に楽しみ事が多過ぎて、深く考えたり、誰が何と言おうとも僕はこれが好きという、自分に対して確信の持てる時間がないほど子供は忙しいなと思っています。

文化と一口に言っても、一番大事なものは、じっくりものを考えて、退屈するまで自分自身でいられる時間の豊かさみたいなことが大事だと思います。子供を通じて、文化教育も大事かもしれませんが、もう50年前の一握りの子供が輝くような仕組みではなくて、クラスの全部の子が同じように、派手でなくても、草の根的に、この本は面白いとか、誰が書いたのかわからないけどこの絵にはドキドキするとか、そういう機会があればあるほど良いと思います。そのためには現場の先生方にゆとりがあって、それから子供に関わる図書館の司書の方たちにもゆとりがあって、いい方向に回っていったらいいなと思っています。

石上委員長 ありがとうございます。では、齊藤委員、お願いいたします。

齊藤委員 実は私、間もなくNHKの仕事が終わろうとしておりまして、さいたま市に30年住んでいるのですが、いわゆる「埼玉都民」でした。さらに、マスコミで東京から発信するという仕事をしていましたが、そうではない、住んでいる地元のある種文化の創造ということと、それから、今、前の方からお話があったように、それを受け止めて享受して、さらに市民が創造するということがあると思うのですが、そういうものを今住んでいる地元で、私が持っている知識で何か役立てられたらと思います。

NHKで若いころ広島に転勤したときに、ちょうど広島市はフラワーフェスティバルというものを始めるときにぶつかりました。そのとき始まったフラワーフェスティバルは、毎年やって、きっと200万人ぐらいを集めるお祭りに市がつくり上げています。ちょうど政令指定都市になったとき、そういうことをやっていて、さいたま市も同じ状況にあると思います。

資料4をさいたま市は意識されていると思うのですが、幾つかのアプローチがあって、資料3を拝見すると、目もくらむばかりのいろいろなことを、今までの浦和市や大宮市や岩槻市、そういう市がいろいろな形で、もうつくってきていると思います。では、さいたま市というのはどういうイメージを持って、どういう創造をして、市民がそれを受けてさらに創造につながるかというようなことに関わってやれたらというふうに思っております。

石上委員長 ありがとうございます。では、柴原委員、お願いいたします。

柴原委員 現在、私自身は子育て中ですが、こういった芸術活動に参加する際に意識していることが3つあります。1つめは、都内に行かなくても済む活動はなるべく地元でということ。2つめには、市や県の便りを見ながら、いろいろな活動に参加したいということ。3つめは、先ほどおかべ委員のお話にもありましたけれども、子供が非常に忙しい時代で、私自身も仕事をしていますので、なるべく単発で1回参加でもオーケーというようなイベント、例えば宇宙科学関連のものですか、あるいは

音楽関連とか、美術関連のイベントなど、幅広くいろいろなものを親子ともに体験を共有しながら参加しているという状況です。

石上委員長 ありがとうございます。竹村委員、お願いいたします。

竹村委員 JTBの竹村です。我々の企業としては、直接的な文化事業としては行っていませんが、側面支援という形で行っています。先ほど条例の話もありましたが、当然ながら、文化振興をするにあたっての経済効果、経済活性化の部分では寄与するところがあるかと思えます。それは、やはり地域外からの交流人口を呼ぶことにより、地域活性化が図れるだろうと思っており、文化振興における発信や集客のお手伝いをさせていただくような形で考えています。

石上委員長 では、三須委員、お願いいたします。

三須委員 埼玉県で芸術文化振興財団の総務部長として、県立の施設、さいたま芸術劇場、浦和の埼玉会館、熊谷会館、この3館を指定管理者として受託しています。そういった意味では、さいたま市内に埼玉会館と芸術劇場があり、これまでもいろいろ協働いただき、ありがとうございます。

今、県と市の立場だと、二重行政が話題になっていますけれども、二重行政をどうするかという議論をしているよりは、できることをしっかり協働してやれば、たぶん県民・市民からすれば、県の施設でも市の施設でも、受ける側にとっては変わらないという意味では、事前によく調整をしながら進めていけばいいのかなと、ある意味では割り切りもしています。

実は私、あまり偉そうなことを言えなくて、文化というのは完全に素人でして、この4月から県から財団のほうに派遣されました。そういった立場で一番感じたのは、やはりどこの自治体も税収減、人口減少で少子高齢化ということで、自由に使えるお金が少なくなってきている中、ハード・ソフトで文化を振興していく指定管理者のコスト面で、日々、本庁とのやりとりでもつらく厳しくなっています。もっといろいろ中身を充実したいという思いがある一方で、そういったジレンマもあり、いかに効率的にサービスをプラスしながら提供していけるかということに苦労しているところです。

ただ、厳しい中でも、必ずやっていかなくてはいけないものというものはあるわけです。例えば埼玉県の芸術劇場で言えば、蜷川芸術監督に非常に頼り過ぎている部分もあるかもしれませんが、シェイクスピアの37本のシリーズのうち今25本まで上演しており、そういったものを世界に向けて発信しています。あるいは、平均年齢が70歳を過ぎたゴールドシアターの40名程度の方々の公演も非常に安定してきている。また、これからの演劇を担っていく若いネクストシアターの方々を育てていく場としても進めていきたいと思えます。

あとは、公共の役割として、やはり県全体を見たアウトリーチ事業です。ちょっとした楽団にいろいろなところに行ってもらって、小学校・中学校あたりで披露し、体験として受けていただく。あるいは、できるだけ多くの方にハードルを低くして入口に入ってもらいたいという意味で、ちょっとした広場で無料のコンサートをやり

ながら気軽に来てもらうような取り組みなどもやり、芸術性、採算性、公共の役割、また地域性の4つのバランスに苦闘しているところです。

石上委員長 ありがとうございます。では、宮本委員、お願いいたします。

宮本委員 私は、国際学院埼玉短期大学で幼児保育学科の学生に音楽を教えております。自分のライフワークとして、これまで演奏活動を行ってまいりました。5~6年前から、ひよんなきっかけでリサイタルをやる機会に恵まれまして、5回にわたって毎年やってきました。リサイタルといえますと非常に堅苦しいイメージがありますが、そういったことを取り払うため、1部を日本歌曲やドイツ歌曲、イタリア歌曲などのソロ、2部をオペレッタやミュージカルのハイライトにしたんです。これが一般の方々に非常にうけまして、「楽しかった」、「力を得た」というような意見をいただき、うれしく思いました。こういうことで市民の方々に力を提供できればということも一面で考えております。

大学では、公開講座「人づくりを科学する、女性のための発声法講座」というものを8年間行っていました。皆さん、声を出すことに非常に興味を持っており、毎年かなりの人数が集まりました。最初は56名だったのですが、8回目には100名の方が申し込まれ、キャンセル待ちをしていただいたような状態です。この方々も非常に意気揚々としていらっしゃいましたので、音楽でこういった経験を生かして自分が力を尽くすことができればということを考えています。

石上委員長 ありがとうございます。では、村木委員、お願いいたします。

村木委員 私は、FM NACK5というラジオ局で、主にイベントの制作などをやっています。芸術文化というと非常に高いものという意識が強いのですが、我々のリスナーで一番多いのが中高生ぐらいから、上は50代、60代までの幅広い、いわゆる大衆の人たちの意見が一番近いところにいると思いますので、その辺を参考に、いろいろと意見を出させてもらえればというふうに思っています。

石上委員長 よろしく申し上げます。では、山口委員、お願いいたします。

山口委員 私も浦和っ子です。昔を思い出しますと、さくらそう祭りが始まったころに浦和児童合唱団で田島ヶ原を歌わせていただき、おかべ委員のお父様の絵も見せていただき、育てていただきました。団体としては、さいたま市音楽家協会というのが前々市長の旗振りで発足し、そちらに30数年在籍して、今、会員が100名以上おり、理事をしています。毎年、定期演奏会やサロンコンサート、埼玉市民オペラの応援でピアニストやプラザイストのこけら落としなどにも、会員が参加させていただいております。

個人的には、ピアノの教師をしており、さいたま市の子供たちの変遷をずっと長く見続けてきました。あるとき、ウィーンでお世話になったウィーンの音楽大の教授を日本にお招きしたとき、どうしても愛するさいたま市に来てほしいと思い、さいたま市民会館で公開レッスンなどいろいろなことをしました。その先生は、「東

京のそばにこんなにすばらしいまちがあったんだね」と言っていたら良かったです。

あとは、教員として、公立の高校やさいたま市内の私立の女子校などに勤務しておりました。そのときに、やはり数十年前、ハンガリーの少年少女合唱団を、当時の浦和市に呼び、何校か合同で子供たちに聴かせるということをしました。また、私立に勤務したときに、世界各国の都市で開催される世界合唱祭が京都で開催され、京都に出張しました。世界じゅうから超一流の合唱団が京都に集まり、また、それを聴きたい方たちがすごい人数集まり、京都のまちはどこの国なのかしらと思うような経験をしました。こういうことも、まちの活性化というか、世界に発信するという意味では大変大切だなと思いました。

また、個人的にですが、ドイツ、アメリカ、イタリアなどに居住した経験もあり、海外でも、例えば美術と音楽が一緒になった形、それを子供に接点を持たせるような形など、いろいろ見てきたことがお役に立てればと思っています。

石上委員長 ありがとうございます。では、山田委員、お願いいたします。

山田委員 大宮盆栽組合では、年1回の大盆栽祭りをゴールデンウィークにやっており、毎年、数十万人の集客があるわけですが、盆栽村は今年90周年を迎えますので、今、記念の行事を計画中です。

個人的に申し上げますと、大宮の盆栽ブランドというのは世界的に大変有名で、世界の盆栽を通じて文化振興を、特に郷土の名前を売るために、いろいろと考えています。

私は、イタリアに日本盆栽作家協会をつくりました。5人ぐらいから始まり、今、ユーロ圏に500人ぐらいの会員がいます。今年は、スペインでヨーロッパ大会を開催しますが、来年あたりはさいたま市でやりたいと考えています。

いろいろな角度から、こういう機会を捉えて、各委員の方々のご理解と賛同を得られれば、規模の大きい、メディアを通じた行事になればいいなと考えています。大宮盆栽ブランドというのは、先人の努力もありますが、非常に重要な文化の象徴として捉える方が多く、そういう点では実ってきたかなと思います。市の盆栽美術館も20年ぐらいかけて完成し、今年で3年目に至りますが、ぜひ今後も利用価値を高めながら、経済効果も上がるような方法を、また、子供たちには郷土の盆栽ブランドを見てもらうことによって、ステータスを感じるといいますか、そういったものになることを望んでおります。

石上委員長 ありがとうございました。

では、私からも少し意見を言わせていただきますと、私は美術教育に携わっているのですが、先ほどおかべ委員がお話しされたことに関して、すごく感じているところがあります。50年前の美術教育というのは、ある意味、文化を啓蒙するというか、啓発するというか、文化を享受できる人は少数派だったのですが、今はそうではない。今の美術教育は何を目指すべきかということが、議論になっています。将来の美術の支援者を育てるのが今の美術教育の使命ではないかという考え方があります。支援者というのは、それぞれの立場で支援をするということで、例えばお金がある人はお金を出すとか、お金を出しやすいルートをつくる。それはたぶん

行政の仕事だと思うのですが、お金のない人はマンパワーを発揮する。ボランティアだと思いますが、いろいろな形で美術を支えるという気持ちを育てていくのが今の美術教育の目標だと議論されているのですが、そういう意味で、文化振興というの、あり方がだいぶ変わってきて、実は不十分なところがたくさんあるんだなということ、先ほどのお話を伺っていて感じた次第です。

<意見交換2 「さいたま市における文化芸術に関わる事業や活動の課題」について>

石上委員長 一応全員の意見が出ましたので、次のテーマに進んでもよろしいでしょうか。では、2つめのテーマです。まず、事務局から説明をお願いいたします。

事務局 さいたま市における文化芸術活動において、今、皆様が活動している中で感じている課題についてお話をお伺いできればと思います。個人として活動を行う際の課題や事業者として事業を展開する上での課題、また、市の文化政策に対する課題など、それぞれのお立場で感じる幅広いご意見を伺えればと思います。

石上委員長 このテーマについて、何かご意見がありますか。ここからは、基本的に指名はしませんので、ご意見のある方からおっしゃっていただければいいかと思います。

おかべ委員 私、大宮の盆栽美術館の近くにある漫画会館の北沢楽天顕正会の運営委員もしています。北沢楽天という方は、宮武外骨さんと並び賞されるぐらいの明治の文人・画家でしたが、非常にユニークな漫画の活動をなさいまして、その方のアトリエが今、漫画会館になっています。こういった文化遺産を活かすにはどうしたらいいだろうかということ、運営委員会でいつも話しています。例えば、ちょっとおかしな話ですけども、北沢楽天稲荷、漫画家を志望する人のために、おみくじやグッズを売るなどしてお客を集めて、そして、そのお客が盆栽美術館のほうに周遊して、あの辺一帯が緑いっぱい楽しいコースになるといいなというようなことを運営委員会で話すのですが、漫画会館は市の施設なので縛りが多く、ちょっとガッカリしています。あんな素敵な面白い盆栽美術館とうまく連携すれば、それこそ小さな子供の遠足でもいいし、それから、いわゆる“ロハス”な若い女の子たちがものすごく盆栽が好きなんです。西荻窪でかわいい雑貨屋さん巡りが好きというような若い女性が、今、盆栽美術館に目を向けているのはすごくありがたいチャンスで、そういうのをうまく活かせたらいいなと思っています。

山田委員 盆栽村は現在、高級住宅地になっていますが、もともと盆栽人があそこに入植、山林を開発し、30軒ぐらいの業者がいました。そのとき、盆栽は10鉢以上持たなくてはいけない、生け垣にしなければいけないなどの規約がありましたが、それが戦争や土地の値上がりにより相続税が払えないということなどで、盆栽業者は大変住みにくくなっているものの、現在残っているところが頑張っているわけです。

また、漫画と盆栽の出会いというのは大変歴史があり、漫画家に盆栽の漫画を描いてもらった時代があります。大変ユニークな漫画が多くありましたが、ああいう

催しを盆栽美術館の中でもう一度やれば、一体感を生み出すチャンスが出てくる。漫画会館は、いろいろ関係が深い場所でもあり、盆栽まつりでは大変お世話にもなっており、今後ともいろいろなアイデアがあれば、いつでもご相談に乗っておつき合いさせていただきたいと思っています。

石上委員長 先ほど縛りがいろいろあってやりにくいというお話がありましたが、三須委員はどういうふうに考えていらっしゃるでしょうか。

三須委員 確かに、法律でできないものとできることがあると思うのですが、今のご提言は、大事な文化遺産をどう活かしていったらいいかということだと思います。やってはいけないことはだめですが、むしろ活かしていかに継続的にやっていくか、本当に地域の活性化につながっていくかというのは、やはり地元の方々のファンの熱がどれだけ沸き起こってくるか、あるいは、行政がそれをつないでいく、支援するということだと思いますので、行政としてもそういう場に行って伸ばしていく。地元から盛り上がったということは、広がりが出てくるということでもあるので、先ほどの盆栽美術館と漫画をつないでいくとか、行政も相当力を入れなくてははいけない。

あとは、一般論として規制緩和が進んでいますので、できないと言ってきたものが、もしかしたら変えられる部分も出てくるのかもしれないし、グレーゾーンも多少はあるのかもしれない。そこは個別に、むしろエネルギーをどんどんぶつけていくような感じがよろしいのではないかと思います。

石上委員長 ありがとうございます。ほかに何か、例えば個人的な活動として、日ごろ感じていらっしゃることはありますか。

柴原委員 親子で参加するという観点からちょっとお話ししたいのですが、さいたま市というのは非常に交通の便がよくて、それが非常に大きなメリットである反面、交通の便が良すぎて、上野でいい美術展があるから行きましょう、ついでに動物園も行きましょう、上野の博物館の中に有名なカフェが最近できたらしいからそこも行きましょうと、ついでのアクティビティが非常にやりやすく、皆さん、都内に行きやすいのではないかと個人的に感じています。都内に対してはアクセスがいいのですが、県内の東西の移動が意外とやりづらく、県民の方に、さいたま市にもっと来ていただくチャンスを逃してしまっているのではないかと感じています。

もう1つの課題としては、例えばさいたま市の指定文化財があるようなお寺や神社でお祭りがあるが、同じ日に重なっていて、どちらに行こうかしらと考えあぐねてしまうことがあります。

3つめには、市の便りなどではいろいろとイベントの紹介があるのですが、神社やお寺にはそれぞれの施設のホームページが存在しておらず、アクセスがどうなのか分からない、駐車場が近くにあるのかもわからず、その結果、何となく行きそびれてしまう。特に、子供を連れて車で移動したいという方は、そういうふうを感じるのではないかと思います。

石上委員長 ありがとうございます。今、3つご意見が出ましたね。交通の便が良過ぎるから、

いわゆるストロー効果というもので都内に人が流れてしまうということと、その割に県内の移動が大変だということ。それから、情報が不十分な場合、そこをどこがフォローすべきだろうということだと思えるのですけれども、いかがでしょうか。

山田委員 例えば、日光には年間300万人ぐらいの観光客が訪れますが、岩槻には、途中下車のように感じて通り過ぎてしまう方が多い。今は自動車社会ですから、やはり大きい駐車場を完備する必要があり、市が持っている土地をもっと開放して、大いに利用すべきだと思います。そういった文化芸術振興というのは、金がかかりますが、やはり金を惜しんでは、文化は残っていきません。そういう活きた金の使い方文化に投資すべきだと思います。

井藤委員 今、岩槻では(仮称)岩槻人形会館を整備するというので、もう6~7年進めており、実際は今年3月に着工というような話がきていたんです。もちろん、これはさいたま市の施設ですから、予算も議会を通り組まれていたのですが、文化的な施設ではあるものの、実施した場合、黒字になるか、赤字が出たらどうするかという話になってしまい、皆さんの支援が受けにくい状況になって、今、非常に苦労しています。私は、文化や教育、福祉、これは必ず黒字にならなくてもいいだろうと思います。言い方は乱暴かもしれませんが、黒字を追求していたらいつまでたってもできないし、それは大きい意味で投資、先行きの投資になるので、そういう財産的なことを考えていただかないといけないだろうと思うのですが、この辺をどういうふうに皆さんに説得、理解させたらいいのか、その辺が今非常に問題になっています。やはり単体では赤字が出るかもわかりませんが、その及ぼす効果は大変あると思うのです。教育にも産業にも観光振興にも大いに役立つと思うのですが、すぐ単体で人が何人入るのかという話になってしまいます。いかに皆さんを説得して、こちらに向いてもらうよう、大変難しいところで頭を痛めているのですが、一般の皆さんからの盛り上げがあってくれるといいなと思っています。

それと、もう1つ併せて、岩槻もそうですけれども、さいたま市の出身で、さいたま市から出て行って、今、非常に活躍している陶芸家や画家などもたくさんいるのですが、そういう人と連携がどういうふうにしたらとれるのか、とってやっていけるのかというようなことも、逆にこちらから聞きたいと思っております。

宮本委員 今、連携というふうにおっしゃっていただいたように、さいたま市の文化芸術を企画して行う上で、やはり人材の発掘が一番必要だと思います。個人情報云々も出てくると思いますが、ここは公募で呼びかけて、どんな人材がいらして、こういときにそれに賛同して参加するなど、そういうことを呼びかけるということからまず始まるのではないかと思います。それをデータベース化して、何かの企画のときに出てくださる方、これに賛同する方とか、大変だと思いますが、まずはそこから始まるのかなというふうに考えます。

石上委員長 実際に人材のデータベースというのはあるのですか。施設はすごく立派な資料がありますが、埼玉県出身の人がこういう活動をしているというようなものはありますか。

おかべ委員 漫画会館では、さいたま市出身の漫画に関わる人について、独自のデータベースというか、人脈を持っているんです。例えば「鉄腕アトム」のアニメーションの声優をやった清水マリさん、本当にお声も若くて、まだお元気でかくしゃくとしていらっしゃいます。その清水マリさんをお呼びして小さな寄席をやったりというような企画を、運営委員のあらい太朗さんがやっていたらっしゃいます。個々にはいろいろな人がいらっしゃるはずなので、うまく連携すれば大きなパワーになるのかもしれないと思います。

石上委員長 私のフィールドで言うと、私の場合は美術の制作もしているわけですが、埼玉県内で若手の芸術家たちがアトリエを借りたりしているのが、実はすごく多いんです。さいたま市内にもちょっと外れたところにあるのですけれども、そういった人達は、やはり東京か海外を見ているんです。県内で発表したり、市展とか県展に出したりしないんです。そういうのをネットワーク化したいというのが個人的な思いとしてあって、埼玉県立美術館などでいろいろ事業を起こしているのですが、まだまだこれからという感じです。音楽関係は、そういう人材交流みたいなものはいかがでしょうか。

宮本委員 私も埼玉に住んで結構経つのですが、寂しいことに、やはり交流がなかったりするんです。都内の友人が多いんです。私も大宮ソニックの小ホールでコンサートをやったところ、お客さんがかなりたくさん入っていただきまして、また次の年もそこでやったのですけれども、ホールを取るのには1年前から予約しなくてはならず、とても大変なんです。ですから、1回実績があれば、少し優遇していただくと根づくと思うのですが、結局、ホールを取るのがすごく大変で、東京に繰り出しまして、銀座の王子ホールで2回、ヤマハホールでも2回やりました。東京に出掛けなくても、こちらでやれば非常にいいと思うのですが。

山口委員 さいたま市音楽家協会は、個人ではできないことをまとめてできるよう、ずいぶん試行錯誤してきました。ちょっとお話は違うようですが、発足当初は市(旧浦和)が主導していましたので、市が事務方となって苦労されて、さいたま市に移行する前後に、文化の援助の形が変わり、各団体から助成金を申請するというような形になりました。一頃はどうなるかと思ったのですが、見よう見まねでいろいろ資料をつくって、今では、そのころより会員も増え、会の中でも何を手伝えるかというふうに変ってきているので、それも文化の継承といえるかもしれません。市民一人一人が力を持っている方が多いので、それを発掘しながら刺激すると、自分たちの力で起こってくるとも思うように思います。

また、岩槻の人形を今でも大事にとっていて、ちょっと壊れたときに直していただきたいと思っても、浦和から岩槻は遠いし、盆栽村も行ってみたいと思いながら、ある程度の時間を取らないと行けない。

この間、私の住んでいる近所でサッカーの国際試合があり、全国津々浦々から訪れた方の数もすごく、ロイヤルパインズホテルの周りは夜10時過ぎまで人が多く、聞いてみると出待ちをしているということでした。その時に、海外でも盆栽は好まれるので、こんなに人が集まるときに盆栽が並んでいたら、きっと涼やかに思うか

しらと。ちょっとしたアイデアでも、さいたま市に眠っている宝物が結集されることがあるといいなと思いました。

石上委員長 ありがとうございます。

大久保委員 コミセンなどをよく使うのですが、例えば大宮の盆栽美術館に行っても、うらわ美術館のポスターを貼っていないとか、コミセンにせっかくのうらわ美術館のポスターが貼っていなかったりすることがあります。なぜ貼っていないのだろうと思ってインターネットで調べると、運営している組織などが違ったりする関係で、貼っていないのかと思います。

おかべ委員 チラシって大事ですよ。

大久保委員 はい。本当にチラシやポスターが大事なのに、貼ってなかったりするので、例えば各コミセンなり盆栽美術館なりに、美術館やさいたままち歩きマップやポスターのような、いいもの、ある程度しっかりしたものを置く。ポスターコーナーを大きくつくって、組織の違いにかかわらず貼っておく。そうしたちょっとした小さいことでも、市民の目につくのではないかと考えています。

おかべ委員 ちょっと弁解させてもらいますと、漫画会館は古くて狭い建物なのでポスターが貼れないんです。昔の図書館の新聞みたいに括ってあげています。でも、好きな人は必ずアンテナを働かせて行きますから、それは本当に大事なことだと思います。1枚のチラシや、こんな小さなビラがきっかけで、いい美術館、いいコンサートへ行った経験というのは数知れずありますからね。

大久保委員 ついでに発言させていただきますと、私はさいたまに移り住んでまだちょうど1年で、横浜から越してきました。同じ政令指定都市ということで似ているように思うのですが、さいたま市というのは県庁所在地ということで、県とのすみ分けということがすごく課題になっていると思うのです。浦和の近代美術館に行きますと、結構人もいますし、緑の中で憩うこともできるのですけれども、残念ながら、うらわ美術館に行きますと、ひっそりと閑散としてしまっていたりして、ちょっと寂しい気がしたのです。どうしても県はスーパーアリーナなど、大きい箱ものがありますから、そこですみ分けをどういうふうにしていくかということが1つ。

あと、いろいろな市が合併しているというのもさいたま市の特徴だと思います。これで見ると、すごくいろいろな公民館なりたくさんの施設を抱えていて、家のそばにも自転車で5分以内に2個のコミセンがあったりするんです。横浜と比べてかなり多く抱えていますので、財政的な問題がどうなのかというのをすごく懸念しています。

あとは、さいたま市というのは、岩槻の人形とか、鉄道とか、下からの動きを市がバックアップして、それを大きな箱ものとか、埼玉の顔にしていくといった、どちらかというとグラスルーツのものやローカルのもの、下からの運動を支えている、そういったところがすごく好感が持てるんです。横浜は逆にそういったものがない

ですから、大きな箱ものとして美術館をドンと建てて、上から世界の名画、セザンヌなどをドンと運んできて、上から、これが芸術ですよ、芸術は見に来なさいという、そういった動きなんです。

それが1つ、文化芸術活動と何度も条例の中で繰り返されていることと関係があると思います。文化というのは、皆さんご存じのとおり、「カルティベート=耕す」ということからきていますから、どちらかというグラスルーツのものです。人間が動物と分かたれるところのものですけれども、アートというのは、もっと美とか心理とか、いわゆる芸術家の作品ということです。文化芸術活動といいながら、どうしても文化活動ばかり、グラスルーツのものを持ち上げたものばかりが強調されてきて、さいたま市にゆかりのあるものというふうに、1つたがをハメてしまっているようなところがあるのではないかと。それとは別に、新しいさいたま市の統一した顔というものを1つつくる、個性も大事にしながら、それをつぶすということではなくて、並行線的にもう1つ新しいさいたま市の顔をつくっていくということもできるのではないかと思うのです。

大阪都構想などはさいたま市も関係してきますから、そういったことで、またいろいろ条件とか、財政面でも変わってくるのではないかというふうにお見受けしております。

石上委員長 ありがとうございます。

おかべ委員 おっしゃっていただけて、横浜との違いがよくわかりました。

大久保委員 上からの動きと下からの動きという全く逆なんです。だから、上下の動きをさいたまでもできたらいいなと思っております。

井藤委員 行政の方に確認したいのですが、さいたま市出身で、市外に出ていってしまっている陶芸家とか、かなり有名な、これからという若い人、日本画をやっている画家もいるんです。そういった人たちと一緒にというか、何かのことで仲間に入れてというときに、これはさいたま市の条例ですから、市民、市民と言うのは最もなことだと思うのですが、この辺はどこかに縛りはあるのでしょうか。それをうまく取り入れるような、さっき言った連携みたいなものができる方法というのはありますか。

石上委員長 いかがでしょうか。今、全体の時間のちょうど半分ぐらいのところに来ているので、ここでトイレ休憩を5分ぐらいとらせていただいて、その間に事務局のほうでお答えを考えていただくというのはいかがでしょうか。

事務局 はい。

(休 憩)

石上委員長 では、再開をしてよろしいでしょうか。
先ほど井藤委員からのご質問について、お願いしてよろしいですか。

事務局 先ほどのご質問でございますが、市の内外を問わず、芸術家、画家等もこの条例の対象となっております。そういった縛りはございません。今のご意見は、審議会のほうにも上げまして議論してまいりたいと考えております。

井藤委員 ぜひお願いいたします。

石上委員長 では、一応2つめのテーマはこれで終了させていただきます。

村木委員 先ほどから皆さんの意見を聞いていますと、さいたま市にある文化を外に知らしめていくことが重いのか、それとも市民の方々にどんどん文化活動に参加してほしいというほうが重いのか、両方大事なことはよくわかるのですが、どちらが優先的なのか、事務局のほうにお伺いしたいと思います。それで話の論点というのが変わってくると思います。

石上委員長 よろしいですか。事務局にお伺いしますということですが。

村木委員 ええ。先ほどチラシの話や盆栽の話もありましたが、ロイヤルパインズホテルで日本代表がいるところに盆栽を置くというのは、興味の共有点がないと思われま。やはり興味のあるところに置いていくということが、たぶん意識を共有できるものだと思います。それは、いわゆる盆栽文化を知らしめるというほうなのか、盆栽活動に参加したいというか、芸術文化の場所に行ってほしいという市民に対してのPRなのかというところが知りたいと思ったのです。先ほどのチラシも同じような話だと思うのですが、それをちょっと伺いたいと思いました。

石上委員長 そうですね。では、また伺ってもいいでしょうか。お願いいたします。

事務局 やはり私どもとしては、どちらかというふうに、今申し上げられる状況ではありません。というのは、やはり二面性というか、市民の方々の文化レベルといいますか、さいたま市内にあるいろいろな文化的な素材がある中で参画していただいて、自分のライフスタイルや生活を豊かにしていただくという部分も、当然、重要な要素で、それが今回の条例の1つの要素だと思います。ただ、もう1点の対外的な側面については、先ほど山田委員からも話がありましたが、盆栽におきましても、今、ヨーロッパで非常に注目を浴びている。それが、たまたまさいたま市にある。それから、人形の視点で見ましても、日本全国でそういった文化を持っているところはあまりない。そういう中で、今、人形会館をつくらうとしている。そういうものを対外的に発信していくということも、非常に重要な要素です。今、委員のほうから質問がありましたが、どちらを優先ということをおし上げるのは非常に厳しい状況で、やはり両方を二面的に進めていく。そして、そのためにどうしたらいいのかということ、この意見交換会の中で皆様のご意見としてお寄せいただき、審議会で検討し、計画の中に盛り込んでいくというステップをとりたいと考えております。

石上委員長 たぶん、この視点というのは、全体としての大きなテーマになると思います。ど

ちらということではないですけれども、どういう位置づけにするかというのは、この意見交換会の中でも、ある程度、青写真を描ければいいのかなと思います。

よろしいでしょうか。3つめのテーマに入らせていただきます。事務局から説明をお願いいたします。

<意見交換3「さいたま市における文化芸術の振興と地域活性化への取り組み」について>

事務局 さいたま市文化芸術都市創造条例の説明がありましたが、その条例に基づいてつくられる文化芸術都市創造計画というものは、文化芸術そのものの振興ということに加え、文化芸術による地域活性化を目指すものでもあります。本計画を進めるために、どういった取組が必要でしょうか。特に重視すべき文化とか、具体的なテーマ、あるいは展開すべき活動、行政としてどんな支援が必要など、自由なご意見をお聞かせいただければと思います。

石上委員長 本テーマについて何かご意見はありますか。これは、たぶん先ほどの質問と絡んでくると思うのですけれども、地域活性化ということは、やはり内側をどう充実させるかという視点だと思います。

村木委員 先ほどチラシやポスターの話もありましたが、まずは、例えば鉄道博物館に来館する方の興味の共有をリサーチしたほうがいいと思います。いわゆるコンサートでも、クラシックのコンサートにポップスやロックのチラシを挟んでいても、ただの紙なんです。やはり興味の共有。では、盆栽が好きな方はほかにどういうものに興味があるのか。浦和レズが泊まるホテルに盆栽を置いても興味がないと思うのです。それだったら、イタリア代表のところに盆栽を置いたほうが興味を持ってくれると思いますし、そういう興味の共有部分というのをリサーチして、当たりの強いところにPRしていくということが必要ではないかと思います。

山田委員 参考になるかどうかわかりませんが、東京サミットのときに、和風別館に盆栽を38 ぐらい配ったことがありました。ミッテラン大統領が盆栽に大変興味を持っており、わざわざ盆栽のそばに来て大変喜ばれておりました。

さいたま市というのは、政令指定都市の中でも内陸部で独特な地形の中にあり、緑の多いまちです。緑というのは、日本の四季の中でいろいろ変化し、色彩を豊かにして、人の生活をいろいろ楽しませてくれる面もあります。

音楽と植物というのも非常に関係が深いと言われ、植物が反応すると言われます。そういうふうにはコラボする、人形を盆栽と一緒に飾るということも考えられることです。同じ伝統産業の中でも、芸術と文化というのは融合性が非常に高いものですから、大きく考えますと、さいたま独自の発想として新しい発想が生まれてもいいのかなと感じます。

内陸部の植物というのは海系の植物と違うところがあり、海岸線の植物というのは限られているのに対し、山岳地帯の植物には日本純粹の植物が多くあります。ヨーロッパのファッションメーカーは日本の盆栽を非常に参考にしていますし、そ

ういうカラフルな色彩、東洋でないと育たない色彩があります。

ですから、そういう参考になる素材を活かしていく。それから、今持っている持ちごまをもっと高めていくという努力をしてほしい。さいたま市の中で、日本のまちの文化を知らない人がまだ多いということは、情報化の時代の中で情けない。やることはたくさんあるのではないのでしょうか。

竹村委員 市町村合併の中で、他の地域のことを知らないということから、観光振興をどう図っていこうかといったご相談が幾つか我々のほうにもきています。その中で必ず行っているのが、地区から地区に行くモニターツアーバスを出し、地域の中の素材を再発見していただくための市民バスツアーです。

今のお話で言うと、例えば大宮の方が岩槻に人形を改めて見に行くツアーを市民向けに格安で日帰りバスツアーを仕立て、その中で市民からの意見を吸い上げていくと、誘客等も含め、いい活力になるのかなと考えます。

石上委員長 ありがとうございます。

おかべ委員 JTBの方にお聞きしたいのですが、こういうのがあったら参加したいというバスツアーがあります。それは、埼玉県の工場見学バスツアーで、三郷の会社で、お菓子やカレーライスなどミニチュアの消しゴムをつくる会社やアイス等を製造している会社の見学に行きたいと思っています。私ぐらいの年の老婦人は、そういうのが結構好きだと思います。

竹村委員 ありがとうございます。今のお話のとおり、昔は旅行自体が目的だったのですが、今は、目的ではなく手段になっていて、その旅先に目的があってこそその旅行という形になっています。ですから、今こういった形で文化芸術の振興を図ることによって、お客様がニッチなものに飛びついているような時代になってくると思うので、今後、このコンテンツは十分発揮されるのかなと思っています。

三須委員 物づくり工場をスタンプラリーで回ってもらうことは、観光の1つのオプションとして経済の活性化にもなり、子供の仕事への興味を促すなど、いろいろな横串を通した形で興味を持ってもらえるような活動になっている。そういう意味では、文化産業という言葉はまだないかもしれないけれども、そういったものも1つのアイデアかもしれないですね。実際に試してもらうのもいいかもしれないですね。

村木委員 埼玉県観光地に行こうというのを、JTBとNACK5で協力してやります。大学生に、行田市というのはどこにあるかと聞いたら、分からない学生もいるそうです。今年、「のぼうの城」が上映されることもあって、ツアーを企画しています。県としても、埼玉県内の観光地のPRが弱いということで、今、JTBと一緒にやっていることが、事例として1つあります。

柴原委員 先ほど山口委員のほうからコラボという言葉が出されましたが、意外な組み合わせというのが、参加する側からしてみると非常に魅力的なんです。例えば、さいた

ま市の文化芸術で非常に宝だなと思うのが、盆栽、岩槻の人形もそうですし、あとは大宮の氷川神社。うちは子供が小学生ですので、運動会の際に浦和おどりという盆踊りをやるのですが、例えば浦和おどりと大宮踊りがどう違うのかというような単発の講座をやったり、地元の呉服店とコラボをして浴衣の着方レクチャープラス盆踊りの練習、あるいは、赤ちゃんがいらっしゃるママさん向けに簡単に縫える甚平さんの作り方も一緒にやって盆踊りのレクチャーも受けるなど、体験してなおかつ、お持ち帰りができるものがあると、非常に魅力があるのではないかと思います。

石上委員長 ありがとうございます。非常に面白く伺っていますが、さいたま市もそうですが、埼玉県は意外と地域差があるんですね。意外と県内の人は、それに気がついていなかったりするのかなという気がします。

先ほど出た、興味の共有のリサーチという視点はすごく大事だと思います。2つ目のテーマのときも伺いたかったのですが、今、インターネットというものがあって、そこで情報を享受しているものと、チラシという全くアナログのものが両方ある世界の中で、文化というのはまさに意外なもののコラボによってまた新しいものが生まれたりすると思うのですが、マスコミ関係の方は、今、どういうふうに対応を考えていらっしゃるのでしょうか。

村木委員 今、インターネットやSNSにより情報共有してくるものと人とのつながりというのがすごく簡単になり、正直、普通の一般的なコンサートの動員というのは結構落ちています。昨日まで富士ロックフェスティバルをやっていましたけれども、フェスみたいなものは結構動員もあるのですが、では、そこに出演していたあるアーティストの単独コンサートに行くかといったら、それは落ちています。全体にお祭りが好きで、日本代表がオリンピックで勝ったら盛り上がるんですけど、その選手が大宮でやる試合になると、人は来ないんですよ。特定の選手が見たいわけではなくて、日本代表が見たいとお祭り騒ぎが好きで、騒ぐほうに興味が強くなっていて、コンサートに関しても、フェスだと1回1万円ぐらいで頑張れば20アーティストぐらい見れる。1曲しか聴いていなくても見た気持ちになってしまうというのがあり、それ以外の情報は全部ネットで取ってしまう。変な話、YouTubeなどでコンサートの映像がたくさん載っていますから、1曲しか見たことがなくても、YouTubeを探せば、どのようなバンドかわかたりします。情報はインターネットで得られるので、探しに行くことが面倒ではない若い人たちは、そちらのほうに動き始めています。チラシというのはある程度与えられるものであって、興味のあるものには行ける。だから、情報の得方がインターネットでずいぶん変わってきたような気がします。

おかべ委員 埼玉スーパーアリーナで行われる大きなイベント、あれもフェスと言えるのでしょうか。

村木委員 はい。アニフェス、アニソンですね。あれは、漫画の文化と非常にニアだと思います。

おかべ委員 それと、毎年10月にやっている「LOUD PARK」などをうまく使って、「メタルのまち・さいたま」みたいなことはできませんか。

村木委員 「LOUD PARK」自体は、さいたまだけじゃないんです。小屋が空いているとき、千葉の幕張とさいたまと交互にやっているんです。メタルから見たら、「LOUD PARK」は1つのブランドにはなっていると思うのですがけれども、地域とか第三世代はちょっと難しいかもしれないですね。

おかべ委員 わかりました。実は私、NACK5のヘビーリスナーで、いつも埼玉の情報は、NACK5のいろいろな番組から得ています。

村木委員 ありがとうございます。うちは去年の4月から「地元密着」ではなく「地元定着」という表現をして、地域の情報を取り上げていこうとしています。スポーツも今年から入るようにし、プロスポーツからアマチュアスポーツまで取り組んでいるので、地域の情報はできる限り意識的に発信するようにしています。

おかべ委員 地域の情報はどこが強いかというと、地域を知っている人だから批評性が加えられるんです。中を知っている人だから辛口も言える、そういう意見があるから、NACK5の番組が私は好きなんです。

村木委員 ありがとうございます。「LOUD PARK」もそうですが、先ほどのアニメと漫画というのはとてもマニアなもので、かなり有力なコンテンツだと思います。実は、昨日まで香港にアニメフェスティバルを見に行っていたんです。3日間で70万人を動員できるんです。中国や日本からも行っているのですが、出展している材料のほとんどが日本からのアニメなので、日本のアーティストもそこで歌っていますし、アニメもたくさん出ていますし、ゲーム機の展示等もたくさんある。やはり、アジアには日本の文化が少し遅れて入るので、コミックマーケットというか、ゲームのアニメというのは、今すごく人気が高いです。今後、シンガポール・広州でやるということで、3日間で大体30万人から70万人ぐらいの動員があるイベントが行われています。

石上委員長 さいたま市は直接関係ないですが、今、アニメ聖地めぐりといって、埼玉県内のいろいろな地域がアニメの舞台になっていて、そこに世界じゅうからお客さんが来ているという現象があります。さいたま市内も、あまりメジャーではないかもしれませんが、いくつか舞台になっています。

大久保委員 先ほどの、文化というよりも芸術というものも、という話と絡んでくるのですが、先日、プラザイーストで行われた宝塚OGのコンサートに行きました。80歳の義理の母を連れて行ったのですが、宝塚を見るんだと言って本当に喜んでくれたんです。そういう市民を喜ばせる芸術というものもあると思うんです。第一級のものをさいたまに置くということの問題点としては、他の地域との差別化が図れないということと、もう一つ、財政面の問題。いいものと呼ばば、それだけお金がかかります。

そういった問題点を抱えています、それでも、感動する市民がたくさんいるということも忘れてはならないと思うのです。

私が1つ考えているのは、これはもちろんまだアイデアレベルですけども、大坂都構想で、関東でもさいたまと横浜、川崎、千葉と4つの特別の区ができる都市がありますから、その中で巡回展やコンサートの巡回など、関東圏内の政令指定都市との連携などにより、地元の文化と別に、もう一個、並行した形で第一級の芸術作品とのふれあいが、身近に、また、リーズナブルな価格で実現できるのではないかと思います。そうした取組を本当に喜ぶ人がたくさんいるということを考えていただきたいと思います。

石上委員長 参考資料4にもいろいろな事例が載せてあります。こういったものには、結構プロフェッショナルなものが多いのですが、最近の傾向としては、プロフェッショナルなものや市民レベルのものを一緒にやってしまうみたいな発想があって、それがお互いに刺激を与えている事例も多いと思います。一級のもはワンポイントトリリーフでもいいと思うのですが、それを一個混ぜるとするのは、最終的に全体の底上げにつながるかなという気がします。

ずっと情報関係のことが話題になっていると思うのですが、齊藤委員、NHKというご経験と、また、さいたま市在住が長いというご経験から、何かご意見がありましたらお願いいたします。

齊藤委員 資料4で、政令指定都市では、それぞれ文化芸術やそれ以外のことで、主として何をやるかについて、恐らくこういう会議を開いて考えた結果、こういうものが並んでいるんです。恐らく、さいたま市も、違う傾向を持った市と一緒に1つの125万都市になりましたが、それぞれの市がもつアイデンティティがあることと、特にさいたま市は、先ほどからお話があったように、東京に余りにも近過ぎる。

ただし、逆に言えば、東京にあるものを日帰りで使うことができます。例えば、プロオーケストラを育てようと思うと大変ですが、東京から東京交響楽団にきてもらえば、ある種の催し物を彼ら2日でやります。日帰りでやってもらえますから、例えば、これを石川県でやって、ホテル代がどうの、飛行機代がどうの考えるよりは、はるかにずっと低料金でできてしまうんです。その近さで、皆、上野に行ってしまうというけれども、こちらですごいものをすれば、逆に東京の人たちがさいたま市にやって来ますよね。

さいたま芸術劇場はすばらしいというか、余りにもいき過ぎたすばらしいことをやったために、わからないんです。東京の人たちは、「与野？遠いな」と言いますが、遠くはない、30分で行けちゃうんです。NHKは、あそこでもたしか2回ぐらい、現代舞踊の中継させていただいたと思います。あれはいつできたのですか。

三須委員 平成6年です。

齊藤委員 では、18年ですね。できてすぐにそういうことを始められた。でも、あれは突出し過ぎていて、周辺に住んでいる方には、どういう関係があるのかわからないんです。あの劇場に行って、劇場はすばらしいですが、どうしてこの位置につくった

のだろうと思いました。あれを、さいたま新都心の中につくったらどれくらい威力を発揮しただろうと思います。

いろいろなプランがあって、きっと均等性を持っておやりになったからこういうことになったと思うのです。与野市は、埼京線も通って、何か1つ文化の市としてつくらなければという県全体の意思もあったのかもしれませんが、でも、あんなすばらしいホールがどうしてあそこにあるのか。

あれは、東京から発信して、全国のかなりのレベルで見える人が見ようという出し物なんです。あれを、なぜ、さいたま市でやったのだろうというふうにすると思います。ただし、今、この状況になると違います。さいたま市として、東京の人でもやって来なければいけないような出し物をこれからつくることができるのです。

もう20年ぐらい前にドイツのベルリンに行ったときに、「日本の盆栽展があるよ」と音楽をやっている人が言うんです。盆栽をヨーロッパ人なんか理解できないだろうと思っていたのですが、これは違うんだなと思いました。今、さいたま市はそういう発信をいろいろとやっていいと思います。既に盆栽や人形、鉄道博物館など、これは長年にわたって持っているもので、厳然としてあるんです。

資料4に挙げていただいているのは、100万都市が苦闘してつくった内容です。川崎市は、さいたま市と同じ状況に置かれ、同じぐらいの規模です。なぜ川崎市がアジアにならなければいけないのかとも思いますが、わかりません。これを発想する理由があったのだと思います。

では、さいたま市は何をやるんだという具体的な議論を、今日、初の会合でやるべきかどうかわかりませんが、これから話し合っていきたい。私は、そういうために参加したと思っています。今までのお話で、既にかなり蓄積があり、文化事業を進めてきた市が合体して125万都市になったのだなと。では、そこで何をするのか。私は、人を動かさなければだめだと思うのです。人を動かしたい場合にどうするか。私は、この市に人を呼んだとき、ロイヤルパインズぐらいしかホテルはないんじゃないかと思ったりもしますが、でも、アジアの人達が茨城の空港から安い飛行機で来てもらうような工夫をしてもいいし、そういう人たちが来て面白がるようなものをつくればいいと思います。

さっきお話しになっていた市民参加で、市民が集まって何かをつくる、アマチュアもやるということなど、幾つかの層があると思いますが、それとは別個の話です。1つは、さっき委員長がおっしゃった美術のほうでもおやりになっているけど、音楽もそうです。いい観客を育てなければいけない。これは絶対必要で、今、コンサートになかなか人が来なくなっているという話がありましたが、クラシックも、ジャズもロックもそうです。それを引き寄せる。でも、私は、Jリーグは成功したなと思います。またたく間にあれだけのものになったという部分です。

それから、最初に申し上げたように、広島市はフラワーフェスティバルをつくって、30年かかりましたが100万、200万人を呼べるようなフェスティバルになった。私たちNHKも、当初から、会場の中にロックのステージをつくって、そこで一日じゅう県内のバンドを次々と参加させてコンサートを行いました。いろいろな形で、いろいろな市民が参加して、創り上げた。

広島は平和のまちですから、オーケストラコンサートで平和に関する演目を行うことがあります。仮にさいたま市に集まった4市で1,000人のコーラスを結成して、

あのステージでサポーターが歌っている「アイダ」の凱進行進曲の旋律をワーツと歌えばいい。お客さんも巻き込んで一緒に歌うとか、それから、仮に音楽祭みたいなものを創造するのであれば、それは予算規模に合わせて、どういうものをするかというような具体的な議論もできると思うのです。それで、東京のたくさんの人口を引き寄せるぐらいのものをおつくりになればいいのかなというふうに思いますが、あまり先走るといけませんので、これぐらいにします。

石上委員長 ありがとうございます。

事務局 今、齊藤委員のお話の中で、シンボリックな事業のお話がありましたが、これにつきましては、次回以降にご議論していただきたいと考えています。

石上委員長 ありがとうございます。では、このテーマはこのあたりにし、次のテーマに進んでもよろしいでしょうか。

 では、4つめのテーマです。事務局から説明をお願いいたします。

< 意見交換4「文化芸術都市のイメージ」について >

事務局 文化芸術都市としてどんなイメージをお持ちになったでしょうか。文化芸術都市となったさいたま市のイメージというもの、皆様がお持ちになっているものをお聞かせ願えればと思います。よろしく願いいたします。

石上委員長 本テーマについて何かご意見ありますでしょうか。

山口委員 長いこと浦和で教えていますが、昔よりも徐々に振興しており、ある学校を調べると、40人中30数人がピアノを習っている、バレエも相当数習っている、スイミングも英語も習っているというのが、さいたま市の浦和区で主流になっています。さいたま市ではバレエやピアノの普及率が非常に高いという話を聞きます。サッカーも今始まったことではなく、30数年前でも全国優勝するような土壌があって、そのまた前の選手もいて、サッカーのまち・浦和であったというように、本当に長い歴史の中で、培われたものです。それから、チーズの消費やパスタの消費も1。ケーキの1世帯当たり購入額も非常に高いレベルだということです。文化芸術都市のイメージとしては、非常に質の高い市民であるということかと思えます。

 昔から文教都市・浦和と言われていたように、教育面でも非常に熱心でした。うらわ美術館はふだん静かですが、小・中・高とさいたま市全体の子供たちの書道の展覧会があると、大変なにぎわいになっています。例えば、選ばれた子供たちの書を見に来た方たちも、自分の子だけを見るのではなくて、何か文化に触れる機会があると良いと思います。

 先日、東京のブリヂストン美術館でオルセーとオランジェリーとの協賛で「ドビュッシー、音楽と美術」という印象派の企画展が行われており、それに関連して、企業からの支援を受けて三枝さんが国際フォーラムの5,000人のところで「印象

派って何？」という中・高生向けの1,000円のコンサートを行ないました。さいたま市でも、何か大きなインパクトを与えるようなもの、世界からも呼び込むような何かという方向性で、いろいろな企画が考えられるのではないかと思います。

石上委員長 ありがとうございます。

柴原委員 この条例を拝見して、市として非常に一生懸命やっという姿勢が感じられましたので、とてもいいことだと思います。ただ、大事なことは、市がイメージを打ち出すのと同時に、外部の人たちが市に対して、あるいは市の文化芸術振興に対してどんなイメージを持ってもらえるかということだと思います。私、本業が通訳で、イギリスに何年か住んでいたとき、イギリス人は非常に盆栽が好きなんだなということを肌身に感じました。日本の書店に行きますと、英語学習コーナーだけで1つの本棚ができるくらいですけども、イギリスは盆栽やガーデニング関連の本だけで非常にたくさんあるんです。ですから、私たちが日本にいて思っている以上に、海外の人たちというのは盆栽のことが好きなのではないかと思います。

あと、外から見たときのイメージで大事にしないといけないのは、例えば芸術関連の展示品、市の美術館、博物館はそうですけれども、そこに英語の説明があった際に、必ずしもスペルが全部合っていないことがあります。私どもの業界で非常に話題になりましたが、東北博のホームページの英訳が、機械翻訳に任せたものをそのまま載せていて、非常にイメージが悪いと言われていましたので、ぜひそういったところにお金を惜しまないでやってほしいと思います。

もう一つは、コミュニティセンターやホールで既に終わってしまったイベントのチラシやポスターが掲げられていることがあります。やはり、そういったものを外部の方が見たときに、ちょっとさびれているとか、そこまで手がいかないんだなというふうに思ってしまうので、そうならない工夫が求められます。

石上委員長 そうですね。

齊藤委員 恐らくさいたま市は、それこそ“埼玉都民”で教養も知性もある方がたくさん住んでおり、教育としてそういう人たちを育てている方たちが何人もいらっしゃることもわかりましたが、その育てた人たちがお客になるかということ、実は、いろいろなアプローチをしてもなかなかお客になってくれないということがあります。例えば、芸大の先生、音楽にしても、美術にしても、自分の仲間がやっていることを見ない、聞かないということに悩んでいました。さいたま市には相当のものを理解する方たちがたくさん住んでいらっしゃるということは想像できますが、例えば盆栽村などはっきりしたイメージを長年かけて既に打ち立ててきたところは土台ができています。もう一つ、人が動いて、そこに聞きに来る、見に来るという状況をつくる必要があるんですね。この会議をやっていて、恐らくそのことが求められていると思うのですが、我々はどうやったらそれができるのか、市民の知性を活かして生み出していくことができるのだろうかということを含めて、実際の策を練っていったらいいかもしれませんけれども、これはなかなか難しいんです。

ただ、やはり引きつける何かというのは、必要です。札幌でYOSAKOIソーラン祭

りが多くの人を集めて成功したんですね。多くの地元放送局と協力して、またたく間に成功させてしまったんです。あれは知性とはちょっと違うのですが、ただし、あのエネルギーでああいう企画を持って運営すれば、たくさんの市民ボランティアが関わる。そうすると、あそこまでできるんだなというふうに思いますので、ひょっとすると、さいたま市には非常に新たな創造的なものをつくり上げる基盤というか土壌はあって、その上に何をつくるか、どうやるか。

それで、東京のものはどんどん活用したらいいんです。埼玉交響楽団というのもあり、どのぐらいの実力かわからないですが、そういう力も結集して、さいたま芸術劇場のような突出し過ぎたものではなくて、もう少し市民に理解しやすいレベルのものを創造することはできると思うのです。

石上委員長　　今のやりとりで明らかになったのは、1つは、やはりお金をどこに重点的に使うかということと、あと、マンパワーですね。ボランティアというのがたぶんこれから重要になると思うのですけれども、ボランティアをやりたいと思ってもらうためには、やはり仕掛けが必要なのではないかと思います。

柴原委員　　一昨日、札幌のPMFというクラシックの音楽祭に行ってきたのですけれども、現地のボランティアさんたちが非常にたくさんいまして、皆さん、非常に朗らかで、お客様をもてなそうという姿勢があらわれていたんです。実際に間近で見て、札幌市ってすごいなと市のイメージがよりよくなっていくのを感じたので、やはりボランティアの育成というものも大事になってくると思います。

もう1つ、PMFで思ったのは、PMFをバーンスタインが始めて、それが佐渡裕さんに引き継がれ、若手の育成につながっています。さいたま市の蜷川さんをとった場合、では、蜷川さんの次を担っていく人が誰になるのかというようなことも考えると、長期的な若手の育成が大事だと思います。

齊藤委員　　札幌市は、やはり政令指定都市か何かになったときに、PMFを発想したのです。あれはバーンスタインが始めたというか、札幌市がバーンスタインに委嘱したわけです。それで、世界の若い演奏家たち、プロを目指す演奏家たちを集めたオーケストラをつくり、バーンスタインという、当時、カラヤンと並ぶような突出した指揮者を呼びましようと考えた。あの人に幾らかかったかわかりませんが、それは大変な金額です。そういう部分はそうになってしまうんです。でも、世界の若い目を札幌市に向かせる役割は十分に果たして、今もそういう活動が毎年あるということは、恐らく世界で音楽を志す人たちは知っています。そのことによって、札幌市のイメージと、それから、あそこにすばらしいホールをつくりましたね。札幌コンサートホールKitaraは世界最高水準のホールです。ですから、それはお金をどう重点的に使うかという部分、それから、そこに1,000円札を払ってくれる市民を開拓すること、それから、無料でもサポートしたいという市民感覚をつくる、そういうことをやっていこうではないかというのが、この会議ではないかと思います。

三須委員　　確かに、ボランティアも含めて、いかに人を引きつけていくかというのがこれからの計画づくりの大きなポイントになると思います。特に、条例の2条の(2)で

「文化芸術都市」というふうに宣言するわけです。文化芸術を享受することにより、市民と文化芸術以外の分野における活動が促進される。要するに、ボランティアやNPOなど自ら行動を起こす人から見れば、たぶん音楽だけではなくて、それをきっかけにして、例えばボランティアであれば、いきなり防犯やごみ拾いに飛んでしまう人もいますが、行政に対して横串で行動を起こさせるようなエネルギーになっていくこともあると思うのです。

そういった意味では、地域の活性化につなげるという定義のところ、これを実践するための計画というのは何を書き込めばいいのか非常に難しいと思いましたが、今、齊藤さんがおっしゃったように、人を引きつける魅力ある都市づくりというふうに広く考えれば、少しヒントが出てくるのかなという気がしました。

あと、私どもは行政職員という立場でもあるので、ちょっと胸が痛いところもあるのですが、「他の施策における配慮」というのが8条にあって、「市は、市が行う他の施策の推進においても、文化芸術都市の創造に資するように配慮するものとする。」という意味では、やはり部局を超えて、住民と相對するとき、あるいはこの会議から意見が出されたときに、やはり全体を見られる立場の人にもよくお聞き取りいただいて、各部局のキーマン、それぞれのキーになる人にきちんと伝えていっていただくような形をとれば、計画をつくるに当たって、より深まっていくのかなという感じを受けました。

村木委員

先ほど齊藤委員がおっしゃったことで、やはりオーディエンスを育てるということとは非常に重要だと思います。その反面、「埼玉都民」と言われているように、埼玉は家賃が安いということも含めて住んでいる人も多いと思うのです。確かに、芸術レベルの高い方々もたくさんいると思うのですが、うちのラジオなどを見ていると、生活レベルは決して高くない人のほうが多いんです。先ほど話に出た宝塚の方々にもゲストで出てもらったのですが、反応が弱かったんです。ただ、別の番組で、豆腐をプレゼントするというと、すごい応募がくるんです。だから、現実的なもののほうに目がいってしまう人のほうが、リスナーとしては、さいたま市だけとは言わないけれども、非常に多いので、レベルの高い方が多い割には、大衆レベルの人が1,000円、3,000円払って行く、もしくは5,000円払うということは非常に勇気のいることなので、大衆の教育というのは非常に重要だと思います。

今のさいたま市にとって、文化芸術の都市かと言われたら、そんなイメージは全くないと思います。サッカーのまち・さいたまというのは、すごくあると思います。スポーツという分野で、去年でしたか、スポーツコミッションを立ち上げたのは非常にいいことだと思いますし、スーパーアリーナというところは、スポーツもそうだけでなく、芸術やコンサートも呼び込めるところで考えると、非常にいいアイテムだと思います。「サッカーのまち・さいたま」というありふれた赤いピッチのイレブンから始まったのかもしれませんが、そういうレベルも含めて、時間がかかるものではありますが、オーディエンス、市民等も含めて意識づけをしていくところから、PRを含めて行っていくことが必要だと思います。

石上委員長

ありがとうございます。
そろそろ時間がきつつあるのですが、あと10分程時間がありますので、そのほか

質問や提案でも構いませんので、何かございますでしょうか。

宮本委員 知的レベルを上げるための方策として、やはり小・中・高一貫して、芸術に親しむ機会をつくるということが必要ではないかと思えます。非常に残念なことですが、それでも、「モーツァルトって何？」という子もいます。DVDでもいいですから、そういうものを見せると、「先生、すごい」と言ったりするんです。やはり提供しないとわかっていけないという子がいますので、ぜひそういう機会をつくっていただきたいというふうに考えます。

石上委員長 私もそう思います。

五十嵐委員 鉄道博物館にいらっしゃるお客様は、鉄道マニアの方だけではなくて、小さなお子様やご家族連れ、それからご年配の方もいらっしゃいます。鉄道マニアの方だけが楽しむというわけではなくて、小さなお子様も鉄道が好きになって、ファンになっていただけるよう、いろいろなイベントなどを考えています。子供たちに夢や希望、きっかけを与えられたらと思っており、そういったことも文化芸術活動に入れていったらいいのではないかと思います。

石上委員長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

大久保委員 やはり条例の定義の第2条のところを見ますと、「文化芸術」の定義というのは次に掲げる芸術等であって、「盆栽、漫画、人形、鉄道といった地域の活性化及び」、それが としますと、 として、「都市としての魅力の増進に資するもの」というのがあるんです。つまり、 のほうはかなりいろいろところで工夫されて尽力されているのですが、 の「都市としての魅力の増進」というものが、新しい埼玉の顔をつくるということにもつながっていくのではないかと。あるいは、新しい芸術とか、新しい文化創造というものが、今、問われているのではないかと。ですから、盆栽、漫画、人形、鉄道などによる地域活性化と並行して、都市としての魅力の増進ということを考えていくことが、さいたま市の文化芸術活動の成功の鍵を握っているのではないかと印象を受けました。

石上委員長 ありがとうございます。

柴原委員 先ほど小・中・高で啓蒙活動が必要だというお話がありましたけれども、実際に地元の公立校に子供を通わせていて思うのは、アウトリーチコンサートなど、非常によい活動が学校においても紹介されているということです。先日、青少年宇宙科学館に行きましたら、落語とプラネタリウムのコラボという面白い企画がありまして、非常に楽しいイベントでしたが、いかんせん、お客さんが非常に少なかったということがありました。昨年度、桜区にあるプラザウエストで、和太鼓のコンサートがありましたが、そこでも空席が非常に目立ったんです。もっとたくさんのお客さんが来るようにPRが必要だと思います。あとは、さいたま市と教育委員会、地元のPTA等がもっと協力をして、公立校に行っても非常にいい教育を受けら

れるんだということをもっとPRしてもいいと思います。

石上委員長 何かこれだけは今言っておきたいということがございますでしょうか。

齊藤委員 この間の浦和まつりのみこしパレードはすごいと思うんです。浦和の方は価値がわかっているのか。三社まつりは取り巻く人の数が多いから印象が強いのですが、浦和まつりでは、通りに立って、向こうからうねって来る神輿の列を見ると、こんなにたくさんの神輿をほかにどこが持っているのかと思います。中山道は狭いので難しいですが、スタンドをつくって1席1,000円で売ってもいいくらいです。担ぎ手ももっとたくさんいて、どんどん替わりながら、もっと激しくねっていけば、ああいう光景は、結構、感動的なんです。そういう発信力のある浦和の神輿を発信させられるのかなと思います。

これは文化というか、既にある芸能ですけれども、もう1つ、別のジャンルのものもあって、それを一体化させたような芸術週間みたいなものを今後模索されたらどうかなと思います。ここにたくさん人材を育てている方たちがいらっしゃるようですから、そういう部分で、その人材が興味を持ってくれるようなものをつくったらいいかなというふうに思います。せっかくの政令指定都市ですから、そういう行動をすることが日本の国力なんです。そこまで持っていける土壌はあるのではないかなというふうに感じています。

石上委員長 ありがとうございます。では、大体時間がきていますので、よろしいでしょうか。以上で全て終了いたしましたので、議長の職を下ろさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

事務局 石上委員長、ありがとうございました。